

鳥取県青少年育成アドバイザー 協議会通信

鳥取県青少年育成アドバイザー通信 46号
鳥取県青少年育成アドバイザー協議会
発行日 2006. 3. 17
編集 芳村恵子
〒680-0002 鳥取市浜坂東 1-10-15

鳥取県青少年育成アドバイザー

協議会研修会

日時 平成 18年 2月 11日 (土)
午後 3時～

場所 羽合温泉 翠泉

出席者 西田事務局長 山本会長 西浦
井上 東 清水 新川 馬屋原
熊本 菊澤 伊藤 田中 芳村

* 山本会長挨拶

今、文句を言う人が多い。何でも人のせいにする。自分が悪いと言う人はいない。

これは「ありがとう」という気持ちが欠けてしまったためではないか。親殺し・子殺しもお互いに「ありがとう」の気持ちがあれば、起こりえなかったのではないか。

感謝をして生きることが大切である。態度で、眼で、口で現す。それが合掌して「ありがとう」という姿である。

また、何でも探求して行こう。自分出来る事は何かを見つけ、それを実行していこう。



* 研修会

「倉吉技術専門校鳥取分校

総合実務科について」

障害者生活相談指導員

熊本 信幸氏

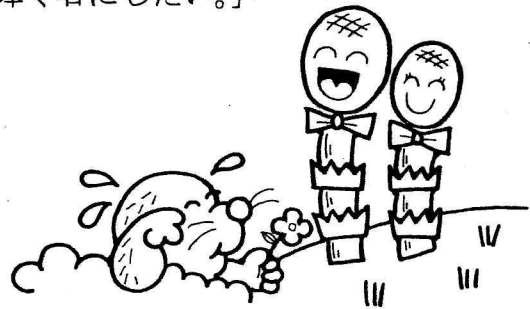
就職することを目的に、職業訓練をしている。そのためにハローワーク経由で学校紹介される。通勤できなければ就職できないから、自宅より通学することを原則としている。

また、障害のあることを不憚に思っか、大事(?)にされていて、十分にできていないことがあるので、朝の挨拶から様々な基本的生活習慣の定着を図る訓練が必要である。

そして、自分の欲しい物探しをすることからスタートし、お金を稼ぐために就労する気持ちになるよう働きかける。

1年間訓練しても、就業率は5割である。

「私は宝石職人、ゴツゴツの原石を研磨して光り輝く石にしたい。」



* 「青少年の現状について」

青少年育成鳥取県民会議事務局長 西田淳二氏より、お話を聞かせて頂いた。

鳥取県警察本部少年課統計より、用語の説明や平成17年中の非行少年の総括を示された。3年前まで全国ワースト1だったが、10番目となり、総合的に判断して、県内の少年非行は全体的に減少したと評価できるということだ。

また「声かけ事案発生状況」を場所・被害者・被害状況・不審者と細かく示された。普段テレビや新聞で見聞きして入るものの、県内でもこれほど多くの被害があったとは驚いた。中でも、女子学生が自転車で帰宅中、すれ違った車が、女子学生にクラクションを鳴らして停め、「防犯パトロールで地域を回っている。一人じゃ危ないから送ってあげる。」と声をかけたものなど、何と悪質かと怒りを感じた。



裏面に続く

次に、わが国の少年非行の様相として、酒やタバコから恐喝そして盗みと進む

「エスカレーション型非行」

誰でも良かった、カットしたからと

「いきなり型」

注意されたからなど

「ストレス型」

弱いものいじめなど

「集団型」

報道などから全国犯罪を真似る「模倣型」

がある。

これらを生活空間に配慮した非行対策を考える場合、これまでは「家族」「学校」「地域社会」の3つが言われていた。しかし、今は、携帯電話やインターネットといった「情報空間」と、深夜徘徊やジベタリアン族という「居場所的空間」という第4・第5の空間に目を向けなければならなくなった。

地域の姿勢や意識・住民運動、そして関係各機関の協力で、青少年に有害な雑誌やビデオの自動販売機が完全撤去できたが、ビデオ店でもっと安く堂々と売られていたり、インターネットで安易に買える現実があるということで、大人として情けなく感じた。

その他、ニートの問題もある。完全に仕事しないで遊んでいる

「ヤンキー型」

家に引きこもって家族とも話さないような、

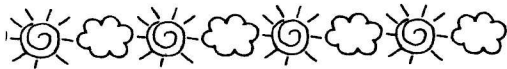
「引きこもり型」

社会にでる前に高校・大学の時点で辞める

「立ちすくみ型」

一度就職して辞めてしまう「つまずき型」

など色々な状況があることを学んだ。



こんな暗い話の中で、ある方のエピソードを聞き、心温まる思いがして、みんなの顔がほころんだ。

「何でも鑑定団」の北原氏は自分の誕生日に、『産んでくれてありがとう』と自分の母親にプレゼントを送り続け、常に感謝の気持ちを表わしているということだ。

やっぱり、「ありがとう」なのだなと思った。
芳村恵子

『3歳までの家族の愛情が大切』

「キレル」子供たちの心の解明

文部科学省「情動の解明」報告

「キレル」子供たちの問題について対策を話し合っていた文部科学省の「情動の科学的解明と教育等への応用に関する検討会」(座長・有馬朗人元文相)は十月十二日、**「切な情動の発達については、3歳くらいまでに母親をはじめとした家族からの愛情を受け、安定した情緒を育て、その上に発展させていくことが望ましい」とする報告書**をまとめた。「現段階で科学的に確かと思えるもの」をあげ、**「父母の愛情を柱とした乳幼児期からの家庭教育の重要性を科学的視点から明確にしたもの」と**言える。

「情動」は、「好き、嫌い、喜び、哀愁」など一時的な感情の動き。同検討会はこの情動を子供の心を理解するキーワードとし、今年一月から脳科学や医学、教育学などの**「専門家」**が、各分野の研究成果を**「教育現場の指導に反映させる方策」**について検討してきた。
報告書では、これまでの研究から**「明らかにになったこととして、次の点をあげている。」**



子供の情動等に関して、明らかにしていること

文部科学省「情動の科学的解明と教育等への応用に関する検討会」報告書

- 子供の対人関係能力や社会的適応能力の育成のためには適切な「愛着」形成が重要である。
- 子供のこころの健全な発達のためには基本的生活リズムの獲得や食育が重要である。
- 子供が安定した自己を形成するには、他者の存在が重要であり、特に保護者の役割が重要である。
- 情動は、生まれてから5歳くらいまでにその原型が形成されると考えられるため、子供の情動の健全な発達のためには乳幼児教育が重要である。
- 成人脳にも高い可塑性を示す領域があり、この点を意識した生涯学習が重要である。
- 前頭連合野や大脳辺縁系の機能が子供たちの健やかな発達に重要な機能を発揮しており、前頭連合野の感受性期(臨界期)は、シナプス増減の推移から推論すると8歳くらいがピークで20歳くらいまで続くと思われ、その時期に、**「社会関係の正しい教育と学習が大切である。」**

清水成真さんより提供された資料より

「親業」について

西浦 公子

親業訓練講座や講演会などで話すことによって、一人でも多くの、より良い人間関係の親子・夫婦・友達・先生と生徒などになればいいなと思って活動しています。

「親業」は、家庭内暴力や少年非行が問題となっていた1960年代、アメリカの心理学者トマス・ゴードン博士によって考案された具体的な対話方法です。

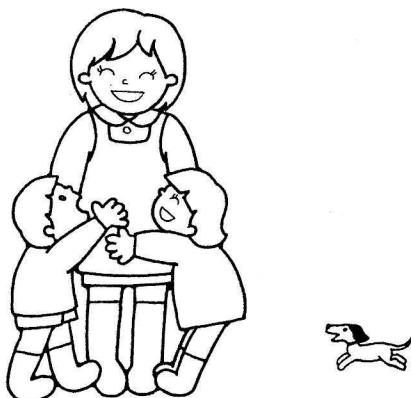
親は、子どものことが心配で、子どもに良かれと思って、あれこれ指示・命令したり、叱ったりしますが、それが子どもにとっては、わずらわしさを感じたり、親は自分のことが嫌いだと思ひ込んだりする原因になっています。

親業では、子どもの思いをそのまま聞き、親の思いをそのまま子どもに伝える具体的な対話方法があります。

「能動的な聞き方」は、子どものことを否定せず、理解し共感しますので、子どもは、親が自分のことをわかってくれたと信頼し、心の扉を開け、自ら解決策を見つけることができるようになります。

また、子どもの行動が受け入れられない時には、「わたしメッセージ」を使います。子どもを非難するのではなく、私が主語の「わたしメッセージ」で親の思いや感情を正直に伝えます。すると、子どもは、自分のどの行動が親に嫌な思いをさせているのかが明確になりますので、行動を変えやすくなります。

しかし、行動を変える・変えないの決定権は、子どもにあります。お互い、気持ちが分かり合える対話ができることで、信頼関係が生まれ、より良い人間関係が築けることになります。

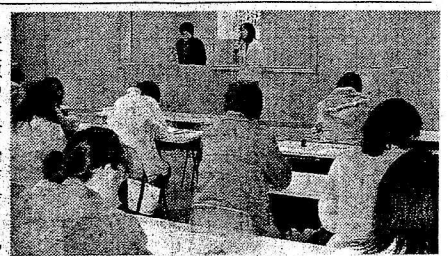


「親業」について学ぶ

関金で県連合母子会交流会

県連合母子会（杵島和江会長）は九日、倉吉市関金町大鳥居の県立農業大学校で、本年度二回目の「ひとり親家庭の交流事業」を行った。県内の母子・父子家庭の親子ら八十人が参加。親たちは、研修会で「親業」について学び、子どもたちはお手玉遊びなどで楽しいひとときを過ごした。

研修会では、杵島会長が「子どもが健やかに成長していくため、コミュニケーションの取り方を学んでほしい」とあいさつした後、講師に招いた親業訓練インストラクターの西浦公子さんが「親業に学ぶ子どもとの接し方」と題して講演した。



講演の中で、西浦さんは人の話の聞き方について、参加者にロールプレ

イングしてもらいながら説明。「よい関係となる第一歩は、相手の思いを受け取ることが大切」とし、尋問しないなど三つのタブーを訴えた。また、子どもたちとの関係については「子どもは親の所有物ではない。人格を持った人間。親は子どもが自立する援助をして、大事に育ててほしい」と話した。

親業について学んだ
研修会9日、県立
農業大学校

研修会の間、子どもたちはお手玉を楽しみ、昼食後は親子が一緒に挑んでキーホルダー作り挑戦し、交流を深めた。



編集後記

せっかく元気良く伸びた土筆が、真っ白な雪に頭だけ出していました。この冬最後の寒気団が暴れているのでしょうか。本当の春はまだまだですね。

あちこちの新一年生が待ちわびている生活が、希望に満ちた輝かしい日々でありますようにと祈りたいものです。

私達も、地域のおじさん・お婆さんとして子ども達と共に歩んでいきましょう。